

豊かな海づくり

天草灘や有明海、八代海の3つの海に囲まれている天草。私たちは、日々海からの恩恵を受けて暮らしているといっても過言ではありません。

そこで、天草の海の豊かさ、大切さを今一度考えていただく“シリーズ「豊かな海づくり」”を、今号から3回にわたって掲載します。

今回は、牛深の昔の海を写真で振り返るほか、御所浦町で現在も続いている伝統漁法“とんとこ漁”について紹介します。

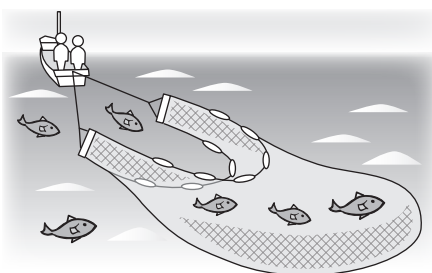
御所浦の伝統漁法 “とんとこ漁”



▲地元の中学生を対象にした“とんとこ漁”体験のようす

“とんとこ漁”は御所浦に昔から伝わる漁法で、一般的には吾智網漁といわれているものです。一艘の船で、袋状の網と魚を追い込むためのチェーン付きのロープを使って行います(下図参照)。以前は、この漁を行うときに魚を追い込むため船をたたいており、その音から“とんとこ漁”と呼ばれるようになったといわれています。

◆とんとこ漁のしくみ



牛深の昔の海を 写真で振り返る



クロマグロが大漁

写真①は、牛深で水揚げされたクロマグロです。写真には、「昭和14年2月18日^{まぐろ}鮪大漁記念」と書かれています。当時、牛深沖にはクロマグロがいて、帆船で2～3人の乗組員により一本釣りで漁をしていたそうです。体長や重量などは不明ですが、見物人の大きさと比較することで、相当に巨大なクロマグロであったことがうかがえます。

イワシの水揚げが全国2位

昭和20年代、天草はイワシの宝庫でした。この一大拠点となったのが、牛深港です。昭和24(1949)年には、同港のイワシの水揚げ量が全国で2位を記録しました。このときに行われていた漁法は巾着網漁(まき網漁)で、魚を取るときの網の形が巾着財布に似ていることから、この名前がついたといわれています。網を張る“網船”と、魚群を探す“灯船”、取った魚を運ぶ運搬船など5艘程度が1船団になって漁を行います。写真②は、巾着網による操業のようす。大量のイワシが網に入っているのがわかります。

(写真提供: 吉川茂文さん〔牛深町〕)

“とんとこ漁”を子どもたちに伝えていきたい



うらもと まさのり
浦本 正準さん
(御所浦町御所浦・76歳)

妻とともに、昭和41年から地の近海で“とんとこ漁”をしています。主にタイやフグ、タチウオなどが取れ、1年を通じて漁を行っています。

とんとこ漁は、私が子どものころから行われていましたが、冬にタチウオをとるようになっからです。もともと、タチウオはいたんですが、網をかみちぎってしまうので取るのを避けていました。ところが、このタチウオが高値で取り引きされていることがわかったんです。

また、とんとこ漁は春から秋までが主な漁期で、冬の漁はあまり思わしくなかったんです。それで、タチウオを取れば1年を通して漁が成り立つというこ

とで、広まったんだと思います。

いちはん多いときで、当時は御所浦町全体で50艘以上の船がとんとこ漁をしていたと思います。そのころは、とてもにぎわいを見せていましたね。

現在、御所浦町でとんとこ漁をする船は、私も含めて10艘くらいになりました。私はこの漁が大好きですのでまだ続けたいと思っていますが、10年後はどうなっているかわかりません。

とんとこ漁がなくなってしまうのは、やはりさみしいですね。それでも、12年ほど前から地元の中学生や修学旅行で御所浦を訪れる子どもたちを対象にして、とんとこ漁体験を行っています。子どもたちは目を輝かせています。子どもたちは目を輝かせて、「こんなにおいしい魚を食べたのは初めて」と、とても喜んでくれます。天草の海はすばらしいということを、再認識する瞬間です。

今後、子どもたちに御所浦の伝統漁法を伝えていきたいと思っています。

イワシの加工は住民総出 学校が臨時休校になることも



さばえ かなめ
鯖江 要さん
(牛深町・79歳)

クロマグロがよく釣れていたころ、私は4歳か5歳でした。記憶している中でいちばん大きなものは、約36貫(約135kg)もありました。子ども心にとっても大きく感じたのを覚えています。

昭和24年ごろは、イワシの巾着船の乗組員をしていました。このころは46の船団(約230艘)が牛深港を拠点にして漁をしていたと記憶しています。当時は、イワシを取っても生きたまま流通することがほとんどなく、大部分が削り節や魚油などに加工されていました。このため、大漁の日は加工に多くの人手が必要になり、住民が総出で作業にあたりました。ときには学校が臨時休校になって、子どもたちも手伝いにかりだされるほどだったんです。